

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第49巻2月号(通巻595号)

風土



2

ふくさ藁

神蔵器

てのひらにマリアのごとき冬日かな

初日さす大硯面に陸と海

万葉の詠み人知らず初硯

雪吊縄一本づつに初日さす

大櫂四五本の寒に入る

笹鳴や女のしなふハイ・ヒール

初詣 昼 三日 月のうすうすと

産土の風高鳴つて破魔矢受く

ふるさともうない山とふくさ藁

恵方てふ己が歩幅に歩みけり

虚子の句と晶子の歌と初昔

さらさらさらと神田川 去年今年



竹間集

同人作品



冬の鳶

浜 福恵

霧立つや野々村仁清生誕地
丹念に田を鋤き峡は冬に入る
紅葉まつ只中の一山一寺かな
トロツコ軌道残す山路や鴟日和
峡細りゆく日のなかを雪ばんば
九里半の峠の空へ冬の鳶
俳諧の道なき道や瓢の笛

冬の蜂

鈴木とおる

身に入むやひとりの灯しつけてより
到来の大名葱に風通す
師の墓に参る茶の花日和かな
小春日や地図に辿りて旅心
象潟や九十九島は稲の中
屋上の稲荷舎降ろす神の留守
無住寺の畳を歩く冬の蜂

冬の夜

外川 玲子

落ちさうな冬満月や由紀夫の碑
冬の夜の声に出したる「お母さん」
片減りの子の靴磨く霜の朝
十二月骨の障子が干されあり
夕日中点となるまで大根引く
熱の夜の吾をめぐりて北吹けり
ライトアップの紅葉林に深入りす

木 枯 山田 暢子

移り来て

八年の歳月刈田風の中
短日や墓地行き止まり行き止まり
正面にサンシャインビル黄落す
「二輪車の通行禁止」黄落期
枯れに入る枝垂れ桜も刻止めて
木枯へ門燈ひとつ残し置く
木枯や海の蒼さのあふれ出す

冬の雷 門伝 史会

忌を修す明日なき彩に寺紅葉
菩提寺は上杉陣跡石路の花
冬ざる謙信物見の巨岩かな
枯れ急ぐ善光寺平一望に
身に入むや戒壇廻る善光寺
新宿に良寛展や日短か
真筆の南無阿弥陀仏冬の雷

「淡交」以後(二) 野沢しの武

浄法寺町天台寺より安代町不動の滝へ 五句

パンフレットを毛虫が歩む天台寺
梅雨鴉老樹の洞に石地藏
石を抱く桂老樹や若葉なす
おうと声あとは無言に滝を仰ぐ
観爆の手摺に倚りて撮さるる
神酒すでに戴き菅貫の男
練達の舞のはげしく夏神楽

日脚伸ぶ 鈴木 石花

和綴ぢ本造る講座や夜の長し
最終てふ同窓会や木の葉髪
零余子を讃ふ講演冬紅葉
零余子とかな女の句碑や冬木の芽
語り合ふ立体俳句論日脚伸ぶ
冬月の影生む三波石の群
水琴の縁に殖えつぐ水仙花

紅葉の賀

一 門伝 史会 一

小賀玉の幹の直角冬立てり
茶の花や油土塀の雁の寺
思ひたち京の師走でありしかな
暮早し「軒端の梅」を尋ね当つ
通天橋宋より伝ふ唐紅葉
帰り花恋歌つづり千年紀
源氏絵屏風石山寺の紅葉かな
絵の中の一人となりて紅葉の賀
冬桜紫式部とすれ違ふ
五十四帖たどる参道夕紅葉

山河集

同人作品



神蔵器選

老僧の叙勲の沙汰や返り花
石崎 浄

枯山水古武士のごとく枯に入る

雪霰梵鐘の臍はら打たれ艶

沢庵の漬樽転ぶ庫裡の裏

霜柱刺客ごときに歩みゆく

冬籠るしたく煙突高く接ぐ
工藤ミネ子

雪迎へ低きはひくき処得て

小春日を背負ひて母の来たるかな

小春日暮れ手毬のやうな月を上ぐ

吊し柿下より抜けて軒端かな

笈おひ摺ずるに吾も弥陀なる十夜婆
橋添やよひ

日溜りのもつとも密に十夜柿

神旅の湯を噴く由布の一の蔵

蓑虫や地軸の傾ぎなど知らず
躑つときは自戒のはじめ返り花

ゆつくりと拳を開く十一月
浅田 光代

郵便局に僧の来てゐるしぐれかな

青空をひき寄せてゐる返り花

しぐるるや刺子の糸のとりどりに

いまもある祖父の眼光冬座敷

ときじくのかくのこのみの遙かかな
内藤 静

この奥に弘徽殿のある菊日和

初霜や樽に捺されし杜氏の名

ゴシツクの一塔として冬木立つ

木枯や研ぎより戻る出刃二丁

◇特別作品◇(抄)

寺の下界限

石崎 浄

立 冬 の 寺 町 に 入 る 筈 売
鐘 楼 な き 寺 一 棹 の 掛 大 根
楼 門 の 草 鮭 の 丈 を 銀 杏 散 る
冬 の 禽 古 寺 め ぐ り の 先 達 に
回 廊 の う ぐ ひ す 張 り を 踏 む 小 春
八 尺 の 影 霜 に 置 く 茶 筥 塚
観 音 の 千 手 の 揺 る る 煤 払
天 蓋 に 双 頭 の 竜 雪 起 し
法 灯 の 一 つ 洩 れ ゐ て 霜 の 声
声 明 しやう は みやう し ろ が ね の 声 星 冴 ゆ る

風土独語／神蔵器



霜柱刺客のごときに歩みゆく

石崎 淨

霜柱というと決まって思いだすのは、波郷の

霜柱俳句は切字響きけり

である。

昭和十七年春、波郷は「馬酔木」の編集と同人を辞し、同年十一月号の「鶴」から波郷自らの編集となった。新興俳句のモダンズムが志向する散文的傾向を危惧し、古典と競い立つ、俳句の韻文精神徹底を提唱した。そして特に作句に当っての「切れ字」は正に伝家の宝刀、重要性、切れのよさの大事を示された句である。

さて、霜はきまってよく晴れた日の朝である。ことに霜柱は田や畑、庭の隅など充分に水分を含んだやわらかい土地、毛管現象によって地面に沁み出した水が凍結したもので、一つ一つは細い水の柱である。私の故郷は東京都といっても昔は片田舎、子供の頃は二段三段の霜柱も珍しいことではなかった。「刺客のごときに」は言い得て妙。本集、白眉の作である。

冬籠るしたく煙突高く接ぐ

工藤ミネ子

作者の五城目町の平野部は、主として馬場目川河口の三角州が

発達した地域である。冬は日本海側から吹きつける強い風によって山間部は豪雪であるが、平野部はやや少ないようである。しかし全く油断は出来ない。風のない静かな夜と思っていると、一夜にして一メートル二メートルと積っていることもあるようだ。掲出句は説明するまでもないが、実生活から生まれた句は強い。接ぎ足して高くなった煙突の下には、雪国の約半歳の安心が約束され、家族の喜びも悲しみもある。

ときじくのかくのこのみの遥かかな

内藤 静

「ときじく」は、形容詞「時じ」の連用形、いつも芳香を漂わせる木の実（橘の実）で、この句は、京都御所、紫宸殿の前の左近の桜と並ぶ右近の橘を詠っている。

「ときじくのかくのこのみ」は古事記などにも見え、万葉集には、「かけまくも あやに恐し 皇神祖の 神の大御代に 田道間守 常世に渡り 八矛持ち参出来し時 時じくの 香の木の实を 恐くも遺したまへれ」（巻十八・四一一）などに見られる。

古語、万葉語といったものを現代の俳句に使うことはあまり感心しない。しかしこの句はよかった、と言うより見事であった。鍛錬会の吟行、京都御苑の囁目、一瞬の映像を確かにとらえている。

明治二年、東京遷都まで一千余年、平安、室町の華やかな王朝文化、政治、経済の変遷、幾多の戦火にも見舞われて来た。すべてを見尽くして来たただ一本の橘に、時じくの高い香り、はるかな思いをなつかしんでいる。

風土集



神蔵器選

魔法瓶のやうな図書館花八手 高槻

浅田 光代

湖と空ひといろに冬菜畑

子猫にもたてがみのあり冬の雷
短日やにぎり鉢の鈴鳴つて

一条の冬日を容るる霰釜

秋田

工藤ミネ子

手囲ひに移してくれし雪ばんば

柴帚すりこぎ市の冬隣

にはとりの市に鳴き出す小春かな

日に焦げて小粒となりし吊し柿

十一月の古書市百万冊の声 大和

落合 絹代

古書市の端折り返す文化の日

夢二見て山の湖畔に蕎麦湯かな

急変す島の天候日短か

一周す小島四キロ小春かな

剥がしゆく障子三十三間堂 京都

橋添やよひ

はつ冬の内陣二十八部衆

蛇穴に放哉書簡晒さるる

ひととせの運を担ぎて酉の市

十夜鉦烈しく打ちぬ終るとき

文化の日壁に二口ふたぐちコンセント 東京

柿沼 盟子

武蔵野の万の木の実を踏み帰る

一片の雲なき空や木の葉髪

短日や付録の多き雑誌買ふ

どぜうやの昼も灯こぼし冬ざるる

鯛雲子どもの国線駅二つ 横浜

下山田美江

秋うらら猫百態のエッチング

十月や魔女を並べる飾り窓

旧名主石川某や新松子

抜錨の鎖の音や稲光